

令和5年度 第2回山梨県文学館協議会 会議録

日 時：令和6年3月8日（金）13：30～15：30

場 所：山梨県立文学館研修室

出席者

委 員：廣瀬孝嘉、秋山和江、大島わかな、大塚 茂、河手由美香、田口綾乃、出澤忠利、
仲田道弘、成富耕志、長谷川千秋、水石和仁、山本久美子

事務局：（県立文学館）三枝館長、小林副館長、今村次長、高室学芸幹、保坂学芸課長、
齊藤資料情報課長、北村総務担当リーダー、
中野学芸担当リーダー、野呂瀬教育普及担当リーダー

（指定管理者）山口 SPS やまなし支配人、河合 SPS やまなし副支配人
県観光文化・スポーツ部文化振興・文化財課：井筒総括課長補佐、田中主任

- ・開会
- ・会長あいさつ
- ・館長あいさつ

議事

審議事項

- ・令和6年度事業計画について

報告事項

- ・令和5年度事業報告及び予定について

その他

○事務局から審議事項について説明

委員

- ・令和6年度の計画をお聞きしまして、頑張っていらっしゃる、いいなという風に思いました。金子兜太展は、今俳句ブーム・短歌ブームでもありますので、そういうところにスポットライトを当てて企画展を見せるのはいいかなと思いました。それから資料情報課の方で、特設展企画展に合わせて、それにちなんだ催しをするのもとてもいいなと思いました。文学館を訪問しても、閲覧室をあまり知らないまま素通りしてしまう方が多いような気がしていつも残念に思っているのですが、そういうところの改善、もっと多くの方々が立ち寄ってくださるようなことをしていただけたらと思います。
- ・閲覧室の利用が令和4年では2626人、令和6年の1月現在は19118人で、すごく伸びているのは、どんな工夫をなさったのか教えていただきたいと思いました。

事務局

- ・今年度は銭天堂の企画展に非常にたくさんのお客様がいらっしゃってくださりまして、その中で、スタンプラリーを来館者の方々にしていただくという企画がございました。そのルートに閲覧室を含めたことで、非常に多くの方に立ち寄っていただきました。そして、同時期に閲覧室で銭天堂に絡めた展示をしておりましたので、そちらも一緒にご覧になっていただけたからだと思います。

議長

- ・閲覧室が増えたのはスタンプラリー等の仕掛け作りと申しますか、そういうことをした結果だということでした。ただ手をこまねいているということではなく、色々な工夫を凝らしたということがおわかりだと思います。企画展と特設展、それから閲覧室の資料紹介が来年度も連動しています。動線をうまく確保することで、人の動きも大きくなって興味関心が大きくなるのではないかと、というふうなご意見でした。

委員

- ・金子兜太展をされるということで、俳人の枠を超えた幅広い活動を展示していくお話だったかと思うんですけども、具体的にその作品とか、その人の生涯を紹介する以外に、どういう活動を紹介して、どういう展示が予定されているのかなというのが興味がありました。
- ・俳句を学校で勉強したときに、覚えた俳句を、実際文学館に行って目にすると、子どもはすごく嬉しいもので、教科書にちょうど載っているかはわからないんですけども、学校にこの時期にこういう企画をやるので、金子兜太を学校の授業で取り上げてもらえませんかとか、そういう協力依頼、お互いの相乗効果や、学習の相乗効果が出るような取り組みもプラスアルファされると、企画自体も盛り上がるし若い方の来館というのも少し増えるのではないかと申して聞いていました。
- ・あと、閲覧室コーナーという取り組みを知らなかったもので、工夫されているのだなと思ったのですが、どういう世代の方が、どのくらい利用されているのでしょうか。

事務局

- ・金子兜太の俳人の枠を超えた幅広い活動ということで、どういった展示がされるかというご質問ですが、この金子兜太という俳人は、俳句の人だけではなく、幅広い文壇の人やそれ以外の人とも対談したり、交流があったりというふうに関係がありましたので、そういった交流を展示で紹介できればいいかなと思っております。

事務局

- ・今申し上げたその様々な広い交流という面では、俳句だけではなく、歌人の方との交流で

あるとか、作家の方との交流であるとか、というところを申し上げました。つけ加えますと、金子兜太は戦争体験のある方で、特に後半生、戦争に対する想いというものを持って反戦という思いを広く訴えていた、そういう面も金子兜太を考える上では大事な点になるかと思っています。また、“おーいお茶”の俳句の選を務めるとか、一般への普及という点でも活動されていた方ですので、俳句を俳人だけのものではない広く広めていこうとされた、そういう面もご紹介できるとよろしいかと思っています。

事務局

- ・私は短歌の人間ですけれども、金子兜太にすごく影響を受けた世代でもあるんですね。僕が短歌を始めた頃は、金子兜太と、高柳重信という方が前衛俳句、新しい俳句をやっていて、一方、飯田龍太のような正統派の俳人がいて、そういうふうな俳句の広まりに私たちはすごく影響を受けた。ですから金子兜太といいますと、私にとっては俳人というだけではなくて、もっと広い文人としての金子兜太という力が、イメージとしてあります。
- ・それからもうひとつ、あの人はトラック島で九死に一生を得て帰ってきたというそういう戦争体験を踏まえておまして、イデオロギーだけではなくて、自分の生身の戦争体験というものを、戦後の長い社会の中でも生かしながら俳句の活動をしてきた。俳句をそういう意味で言えば、社会的なものにより広めていった人でもあるということも、他の人にはない点かなと思います。やはりね、人物が怪物なんです。そこがすごく魅力的です。楽しい企画にしたいと思っていますから、ぜひご協力いただきたいと思っています。

議長

- ・大変深いお話をありがとうございます。ウクライナの戦争や、パレスチナの戦争だとか、平和が蹂躪されている世の中ですので、なおのことそういう観点からもよろしいかなと思います。

事務局

- ・学校との連携というご意見いただきましたけれども、文学館では年度の初めに、一年間の予定を文学館便りとして学校にお配りしておまして、さらに校長会などでは、今年はどういったことを事業として行いますということをお話させていただいております。今いただいたような具体的なお願いというの、できるだけ個別にできることはさせていただきますと思います。

事務局

- ・閲覧室はエントランスへ入って、すぐ左側の所に、ちょっと奥まっている部屋ですが、図書や雑誌を収蔵している書庫を持つ、図書館機能を持った部屋になっています。閲覧とか複写、レファレンスサービスにも対応しています。どなたでもお使いいただけて、手続き

を行っていただくと図書資料を手にとってご覧いただいたり、複写を取ることもできます。ただ、図書館とは違い貸し出しは行っておりません。文学について何かお調べになる方とか、俳句を嗜んでいる方とかも多いんですが、銭天堂の時は、小学生の方も入っていただいて、展示資料を見ていかれたり、コロナで下火になってしまいましたけれども、学習施設として使いたいという方は、お調べになりつつ勉強もできる机等も用意されていますので、そちらのご利用もあります。小学生とかが図書館を利用するような感じとはちょっと違うかも知れませんが、幅広い年代の方にご利用いただいております。

議長

- ・協議会の委員の中には小中学校の代表や、高校の代表もいらっしゃいますので、折に触れ、文学館ではこんなことをやっているというお話をしていただき、文学館では資料のデータを学校へ送って授業で活用していただく、そんなことが出来たらいいなと思います。

委員

- ・「ふしぎ駄菓子屋銭天堂」の成功体験を元に、今回どのようなものを企画されているのか。また、前回の成功は子どもや親子連れをターゲットにして、文学館と触れ合う機会を作った企画ではないかなと思います。そうすると、読書、文学離れが言われている時代に、やはり文学に親しむ機会を作ってほしい、私どもはそう思っております。そういった企画をお願いしたときに、この中に、前回のふしぎ駄菓子屋銭天堂の企画を踏まえての企画があれば教えていただきたいと思います。

事務局

- ・私どもも、ターゲットが子どもたちである「ふしぎ駄菓子屋銭天堂」の展示を夏休みの期間にやったということは、よかったと思っております。子どもたちが来ることによって親御さんたちも来てくれる、ということを実感した展覧会でした。やはり子どもたちに来ていただくには、夏休みに子どもたちが興味を持つものを行うということが良いと思い、令和6年度は、「文学はおいしい」という展覧会名を考えております。やはり“食”というのは、人間が生きる上で非常に貴重な大切な事ですので、それが文学の中でどういうふうに取り上げられてきたかということ、子どもたちにも分かりやすく、身近なものとして紹介できればと考えております。
- ・また、仕掛けというお話がありましたけれども、スタンプラリーを銭天堂で行った際、当初は展示室内だけで完結して、スタンプを5つ集めたら景品をもらえるということを考えておりました。しかし、この建物の中の色々なところにスタンプ台を設けることによって、様々なところに皆さんの足を向けたいということで、ショップとか閲覧室に入っただけで、閲覧室はいつも、あ、知らなかったということで帰られてしまう方がいるので、その閲覧室を最後にして、そこに行かないとスタンプの景品がもらえないという設置に

したところ、非常に多くの方に、閲覧室に入ってもらうことができ、こんなに簡単な事だったんだということを実感したので、そういったことを来年度も色々なところで工夫しながら行っていきたいと考えております。

委員

- ・文学はおいしいという展覧会がとても楽しみでございます。令和6年度に、高校では新しい教育課程が完成する年になりまして、新しい教育課程というのが探究的な活動をしていくということがメインとなる取り組みでございまして、今までのように文学の読解をしていくだけではなくて、様々な角度からアプローチをして、より多角的に、探求的に学んで行く形になっています。そのときの一つの切り口として、「食」というテーマは、子どもたちにとって文学に親しみやすい第一歩の切り口であろうと思いますし、文学をどのように探求していくかという一つのヒントになるとと思いますので、大変この展示を楽しみにしているところでございます。
- ・また、その関連展示を閲覧室でやって、実際にその資料を手にとることができるということも、今、様々な分野でデジタル化が進行する中で、紙の文化の中で文学が受け継がれていくということを、子どもたちが実際に知っていくという意味でもその連携はとても有り難い事だと思っているところでございます。
- ・また、金子兜太さんの展示も大変楽しみにしているところでして、今の時代、これから正解が見えない未来の時代を生きる若者たちに文学というものの力が、自分一人だけでなく、仲間と、それから社会を支え動かして作っていく力があるということ、考えさせる上でも金子さんの展示、しかも幅広い交流から社会のテーマを考えるものになるということでもあります、これもまた文学を多角的にアプローチして探求していくということにも繋がりますし、若者が文学から離れずに文学に親しんでいくひとつの大きなきっかけになろうかと思っております。
- ・昨年の11月23日に全国の高校の国語の先生方の研究大会を、この文学館を会場に開催させていただきました、およそ300人の方にご来場いただきました。そのときに館長から短歌についてのご講演をいただきまして、かつては青年であった石川啄木であり与謝野晶子であり、そういう歌人の様々な作品を取り上げながら、若者がその短歌に支えられ、未来を拓き生きていく、その系譜を話していただきまして、その文学をさらに支えていくのは高校の国語の教員なんだよと、いうお話をいただきまして、改めて私たち教員の使命を痛感した次第です。やはり短詩型文学というのは子どもたちを文学に引き寄せる大きな力があり、自分と向き合って自分の色々なものを表現するひとつの大きなテーマになっていて、そういう意味でもこの短詩型文学をテーマに挙げていただくことは、若い世代に文学に興味を持ってもらう一つの大きな橋渡しになると思っておりますし、若者を指導する教員世代の人間にとっても、とてもいい勉強になると考えています。
- ・全国大会の時に全国からお集まりいただいた、先生方のご意見を伺いましたところ、美術

館と文学館が一体化しているような形で、非常にオープンに、スムーズに移動できるような仕掛けを指定管理者さんの方でしてくださっていただき、来県された多くの方々に楽しんでいただけたわけですが、やはりミレーの美術館というところで、すごく評判が高いのですが、実は文学館にも素晴らしい貴重な資料があって、もっともっと県立文学館の奥深さとか魅力とか、文学上の価値を広報する必要があるのではないかと、大変嬉しいお言葉をいただきました。ぜひミレーの知名度のみならず、文学館の貴重な資料とか価値とか働きについて、合わせて広報していただけると有り難いということを強く感じたところでございます。

委員

- ・私はこの資料をいただいて、「文学はおいしい」の特設展について興味を持ちました。文学館も美術館もポスターをよく目にする機会が多いのですが、今回の企画で文学作品を紹介するだけでなく、食という身近なテーマと一緒に展示をするという、子どもから大人まで興味を引くようなテーマだと思ったのですが、私が個人的にポスターデザインに興味があるので思ったのですが、この展示を行うにあたって、よく見るような作品、文人の方の肖像画だったり写真だったり、そのようなものを前面に出すポスターより、その食べ物と、その文学作品にこんな共通点があるんだよとか、こんな「食」っていう切り口からも文学作品を楽しめるんだよっていうのが伝わるような、どちらかというポップなポスターの方が、ポスターを見る時点では行ってみたいと思うんじゃないかと思いましたので、やっていただきたいと思いました。
- ・金子兜太についても、おーいお茶の俳句だったりとか、政治に関するキャッチコピーだったり、そういったより身近な社会的な面と関わりがあるというか、そういう部分にも尽力していた方というのを知って、より深くその方がどのように、文学的な俳句、専門的な分野とかそういう堅苦しい印象を壊すような活動をされていたのかというのを、より知りたいと思いました。
- ・俳句については、私自身も小学校の頃から夏休みの課題とかで、俳句を作ってみようというものがあったので、けっこう身近な存在ではあったのですが、作るときに、過去の自分の思い出など、上手く言葉にして表すにはどうすればいいのだろうと思っていたので、金子兜太さんがどういったものを見て、どういったタイミングでこの作品を作られたのかというのが、より分かりやすく知ることが出来るような、展示方法がもしあるのであれば、そういうのも面白いなと思いました。

事務局

- ・ポスターの件について、非常に貴重なご意見ありがとうございます。デザインに関しましては、もちろん我々だけではなくて、学芸課、その他、みんなの確認をとりながら進めているわけですが、おっしゃる通り気をつけていかないと、マンネリ化じゃないです

けれど、ついつい、今までの経験に沿って作って、そうするとどうしても同じようなデザインに陥りがちです。ポップなという言葉がありましたけれども、今まで多分、そういった視点で作ったものがないと思うので、非常に貴重なご意見と思ったので、担当者ともこのあたり、話をしながら、参考にさせていただいて、より目立つポスターを作っていきたいと思います。

事務局

- ・俳句というのは、田口さんから見ると、距離が遠いという感じでしょうか。

委員

- ・自分で作ったり、テレビで見るような、どちらかという現代の作家さんの作品は分かりやすいとか身近に感じるような作品があるので、そこまで俳句自体が遠いというイメージではないのですが、時代的に言葉の使い方だったり、ひと目見たときに、これは何を言っているのか分かりづらい作品があったりすると、その作品から、これは何を言っているのか、どういう背景があるのかということまで、入り込むきっかけがないという、そういうイメージがあります。

事務局

- ・今の問題は、実は俳句だけではなくて、短歌や詩にも通ずる問題で、詩歌は全部のことを説明しなくて、肝心な部分だけで表現するから、その肝心な部分を、言ってみれば僕はエキスなんて言いますが、エキスを解凍して味わうときは、味わい方も人によって違うから、そこが難しく感じる人がいるわけです。もともと俳句は、むしろ江戸時代の町民文化が基本ですから、そんなに暮らしから遠いものではないのですが、戦争が終わったときに第二芸術論というのがあって、短歌や俳句は文学じゃないという批判が非常に強かったので、短歌や俳句を文学にしようと、かなり無理をした運動が広がって、それでちょっと難しくなったという事がありました。金子兜太は俳句の方の先頭ランナーだったから、どういうふうに彼の作品を鑑賞するかということは、難しい点がたくさんあります。それをどういうふうに解きほぐすかということも、今回の企画の一つの大切なポイントではないかなと思います。俳句は文学である、短歌は文学であるという意識を、もうちょっと楽にして、最近一番楽にしたのは、短歌の俵万智さんなんです。そういうふうに眺めてくると、金子兜太も作品の変化を通じて、俳句の奥深さというものを、メッセージとして伝えられたらいいと思っています。ぜひ展示を見て、また叱咤激励してください。

委員

- ・昨年の銭天堂は大変面白い企画と考えておまして、オープニングに出席して家に帰って孫に話したら、一緒に観に行こうと言われたぐらいです。普段から放送局が繰り返し広報

している、そういうこともあると思います。子どもが飛び込むようなストーリー仕立てになっているということを感じました。お土産も廉価で、多めに買ってあまり懐が痛まなかったという記憶がございます。

- ・そして、今年の企画は、あ！やってくれたなど、期待をしています。文学と食というのは、前から気にしていました。私も出張が時々ございます。そうしますとその地域で、昔から食べられているもの、例えば大阪に行ったときに、池波正太郎が食べに行ったかやのご飯をどうしても食べてみたいと思いお店に入りました。皆さん私と同じものを、池波と同じものを頼んでるから、みんな本を読んでいるんだなということを感じました。作家は大変食道楽の方が多く聞き及んでいるので、そういう企画をしていただくと目に入ってくるものと、口で感じるものとダブル効果を生んで、好きになるのではないかなと感じております。
- ・文学館でショップをやっておりますが、企業が今、コラボというのをものすごく重点的にやっています。弊社でもそうですが、品物と、特に絵画とコラボするということをやります。文学館の方でも食の次は、文学と音楽というようなコラボをしていただくと、面白い企画ができるのではないかと思います。
- ・スタンプラリーについては大変興味ありました。行政の方から弊社にも色々な要請が来ることがございます。入口の方にスタンプを置いてくださいとか、ただお店ですから大事なお客様がいらっしゃるところへ、小学生がどどど入っても困るのですが、そうでない限り外の方にわかるように置くとか、スタンプラリーは、客を招き入れる大変重要な要素の一つではないかと考えております。
- ・銭天堂もそうですけれども、この前NHKの番組で取り上げた村岡花子さんの場合が3万4千人、銭天堂が2万人ということで、NHKさん放っておく手はないのではないかと、ぜひ次は食の関係で何かやっていただくと嬉しいなと思います。

委員

- ・開館35周年ということで、大変力を入れて充実した内容になっていると感じました。金子兜太ですが、やはり俳句王国山梨というところで、蛇笏、龍太の豊富な作品、資料もありますので、文学館の強みを生かした展示にして欲しいと思っております。兜太の生き方だったり背景、どのようにして前衛俳句が生まれて、龍太の伝統俳句との対比で、それぞれの背景からどう生まれて来たのかとか、そんな俳句の多面的な魅力を伝えるものになればと期待しています。
- ・食の部分ですが、喫茶コーナーがあるので、そちらで何か作品に登場する食を再現したものを食べることができたらより嬉しいなと思ったり、それを地域のお店とコラボしてやったりしても面白いのではないかと思います。

委員

- ・開館 35 周年ということで、誠におめでとうございます。1989 年の 11 月開館ということですので、ちょうど平成になった年だと思いますけれども、ますます昭和が遠くなったなというしみじみとした気持ちもあるのですが、35 年にわたって地域の文学館としてご努力されてきたことに敬意を表したいと思います。その記念の特設展と企画展の内容を説明していただきましたけれども、いずれも山梨にゆかりのある中村星湖さんですとか、太宰もそうですし、飯田龍太先生もそうですけれども、やはり山梨の文学館の企画だなということで、県民の一人として大変喜んでおります。
- ・やはり、「文学はおいしい」というところが一番目を引きまして、先ほど意見がありましたけれども、コラボした企画がもうちょっと発展してできれば良いと思います。食材とかお店とか、山梨に存在していたお店ということでもよろしいんですかね、例えばテレビでよく視聴率が取れるといいますか、話題になるのは、やはりローカル放送ですと、東京のテレビ局が作った番組でも、甲府のどこどこが映っていたよとか、知り合いのあの人が出ていたよとかになると、とたんに距離が近づいて話題にもなるものですから、やはりこの企画についても、もっと山梨との関わりみたいなものを鼓舞していただければ、話題性も上がってくるのではと思っております。これからも県民の心をくすぐるような文学館としてご努力いただければ有り難いと思っております。

議長

- ・報道関係の方には、貴重な企画をやっておりますので、ぜひ県民に広く周知していただければ有り難いと思います。距離を近づけるという意味でも、広報を効果的にしていけばいいかなと思いますのでよろしく願いいたします。

委員

- ・35 周年記念ということですので、この 3 つの展示、企画展特設展をするに至っては、文学館の皆様の想いが、この企画にしようという想いがあって選ばれているということだと思います。これを選んだことの想いがもっと上手く表に出てくると、観る側も「ああ、そういう魅力があるんだ」と伝わるものがあるのではないかなと思ったのが 1 つ。
- ・それぞれの展示の魅力というものが分かりやすく、観る人の方に、行こうと思えるような、分かりやすく伝えていただくこと、そのためには色々な方々の興味関心と結びつく、自分の中にあるものと結びつくというところがいいのかな、あるいは日頃疑問に思っていることだとか、そういったことと結びつくといいのかなと思いました。
- ・それからもう一つ、この委員の中に大学生の方が入ったということが、すごくいいなと思いました。これからの文学館を考えると、若い方の視点が入ってくると、私たちも刺激を受けると思います。今日もすごくいいことをおっしゃったと思いますので、ぜひこれからもよろしく願いします。

事務局

- ・35周年で、どういう気持ちで私どもがこの企画を立てたか、それを表に伝わるように、そこに色々な工夫をという言葉が本当に有り難く、また身に沁みております。山梨の文学館でございますので、地元の文学を大事にしたい、そういう意味では中村星湖という人をもう一度掘り起こして、山梨の方々に改めて知っていただきたいという思いもございませんし、一方で文学を、枠にはまった狭い所ではなく、実際私たちの、また皆様の暮らしに結びつく中での、興味関心の中で捉え直して考えていただけるような、そういう機会として、文学はおいしいというテーマでアプローチしてみたい、また文学館にとって蛇笏龍太記念室もございますので、その短詩型文学というものを、戦後俳句の中で広くもう一度捉え直したい、そういう色々な想いがございました。その辺りを捉え直して、それを形にするにあたっては、原点を忘れないように考えて行きたいと思います。

委員

- ・興味を引くような、考えられた企画が設定されていることについて、大変期待が高まりました。ぜひ多くの人に観ていただけたらなと感じたところです。やはり食をテーマにされた展示が非常に私も興味を引かれまして、私はテレビ局でディレクターをやってきたんですけれども、食というのはですね、我々が番組を作る時も、食べ物だけを紹介するわけではなくて、その食に意味を向けたりするんですね。例えば、すき焼きだったら豪華なものを食べてるなというイメージを持っていただいたりしますし、食事のシーンで一人で食べているのは淋しいなと思ったりします。文学作品の中にも、食事というものが色々な意味を持っていたり、背景を表していたり、深みのあるテーマだと感じますので、ぜひその辺を観ている人たちに、楽しめるといふか、なるほどなと溜飲が下がるような展示になっていると、色々な人に楽しんでもらえるのではないかと感じたところです。
- ・あと、その時期が夏休みの期間ということで、銭天堂の成功体験を含めてですね、ぜひ子どもたちが楽しめるような演出形態になっているといいなと思いました。おにぎりみたいなものでも、展示に視覚的に取り込んでおくことで、より近いものを感じてもらえるとか、こういう意味があるんだなと感じて、文学の力はすぐに分からなくても何か見えるような演出をされていると、より子どもたちが楽しんでくれるのではないかと思います。どのような演出をされるか楽しみにしていますのでよろしくお願いします。

委員

- ・国も県も文化を観光に生かすというところで、非常に期待をしているところがございます。観光の点から1つ、先ほど課題は宿泊という話がありましたけど、実は数字を見ていくと宿泊ではないんです。山梨の経済規模、全国の色々な経済規模と比べて山梨に宿泊していただく方が落としている消費額は日本一なんです。それに加えて日帰りの方も日本一来ていますので、宿泊が少ないように見えるだけなんです。国全体の観光消費でいくと、

8割方宿泊旅行で日帰りが2割です。山梨は日帰りの方が多いのですが、宿泊だけ比べても山梨はトップレベルにあるということです。そういう中で、何が課題かというところ、これは美術館の協議会でも言いましたが、冬の観光なんです。冬の集客が、ガンと落ち込むことで、そこに合わせて色々な施設が従業員を雇いますので、夏のピークについては、非正規雇用の職員で対応するという付加価値がついていかないんです。ここが山梨の観光消費の最も大きな所です。そのために美術館にも、夏は企画展やらなくてもいいから、冬をお願いしますということを要望してきました。文学館は美術館よりも狭いといひますか、集まる方が限られているので、そんな大きな動きは出ないんでしょうけれども、そういうところを期待するところです。

- ・企画展の観覧者数を追っていきますと、去年の銭天堂が2万人を超して、過去3番目の多さになったんですが、今年につきましてはどういう集客計画を持っているのでしょうか。夏の文学はおいしい、食と絡めるのは非常にいいアイデアですが、山梨の素材がどこに入ってくるのか、芥川の甲州ぶどうというのは非常にいい例だと思いますが、実は食に限らず、山梨の地場産業であるとか観光素材が文学の中に入ってきているものが幾つかありまして、落合直文の探偵小説「甲斐絹」が昨年発見されたらしいですが、それなんかは本当に、文学とか、そういう趣味の方でなくても、甲斐絹だったら観にこようかなということもあるので、食の次は地場産業をテーマにした文学作品であるとか、観光地をテーマにした文学作品であるとか、そういう切り口でやっていただければ、また多くの観光客がお越しいただけるのではなかろうかと思ひます。

議長

- ・審議事項については一通りご意見を挙げていただきました。その他、特にご意見はございますか。

委員

- ・昨年12月、それぞれの源氏物語という特設展がとても素晴らしく、私は各本の装丁の美しさとか、あと一番心に残っているのは、色々な作家の方々が源氏物語を現代語訳している部分でしたけれども、それが比較できるようになっていたのがとても面白かったと思ひています。それで今、NHKで「光る君へ」というのをやっていて、「それぞれの源氏物語」展を1歩2歩早くやり過ぎたという感じがあつて、せっかく今、光る君へをやっているんで、なにかそれに伴って、スポット的にでも展示とかしてもらえるといいかなと思ひています。10年前、花子とアンの時も、村岡花子展にすごく大勢の方が来てくださつて、そしてその後、柳原白蓮さんの展示をやつたりして、それもまた活況を呈したと思ひるので、源氏物語をもう一度取り上げることはできないのかなと、個人的に思ひています。
- ・それと、2025年という年が、戦後80年で、昭和でいえば100年に当たる節目の年なので、そういう年に作家と戦争、例えば太宰とか、井伏鱒二とか、山崎方代とか、山梨にゆ

かりのある方々も戦争を体験なさっていますし、私の記憶によれば三枝館長さんご自身も幼少の時代、甲府空襲をご経験なさったとっておりますけれども、作家と戦争とか、あと昭和の文学というようなことで、今後何か考えていただけたらいいなと思っております。

議長

- ・それでは令和6年度の事業計画について、原案通り承認してよろしいでしょうか。色々ご意見をお伺いいたしましたが、出来るところは取り上げていただければと思います。よろしく願いいたします。それでは賛成多数ということで、令和6年度の事業計画については承認されたものといたします。

○事務局から報告事項について説明

議長

- ・只今の事務局の説明について何かご意見ご質問等ございますか。よろしいでしょうか。新たな催し物への挑戦をさせていただいているようでございます。進化し続ける文学館という感じでございますが、よろしく願いをしたいと思います。いただいた資料をみますと、例えば子どもや家族を巻き込んだ企画、テレビでの話題作と重なる企画、他館とタイアップした企画、特設展と関連企業との同時開催が、利用者の広がり増加に繋がっていると思います。それから話題性がある企画と特設展が連動していると、利用者増に繋がっています。そういう中で、定例的なもの、今まで成功した事業、そういうものを引き継ぎながらも、新たな観点で色々と企画されていると思いますので、また何かありましたら事務局の方にお声がけしていただければと思います。本日もたくさんのご意見を頂戴し、ありがとうございました。

議事終了